

2. 幼稚園で行った漢字教育の実際

大阪市を中心とするいくつかの幼稚園によって始められた“石井方式による漢字教育”は、今では、数多くの幼稚園や保育園によって実施されています。

当初は、「“かな文字を学習させるのもまだ早い”という意見さえある幼稚園教育に、漢字を学習させるとは何事か。乱暴もはなはだしい」という声が盛んでした。

ある幼稚園の園長さんは、顔色を変えて、「私は、幼稚園で、かなを学習させるということにも反対意見を持っているものです。まして、漢字を幼児に学習させるなどということは、とんでもない暴挙で、絶対に許せないことだと思います」と、私に食ってかかりました。

「そうおっしゃるのは、まことにごもつともなことだと思います。実は、私も先生と同じ意見で、“今、多くの幼稚園が行っているようなかな文字教育は早過ぎる”という考え方をしています。

それはさておき、まあ一つ、私にだまされたと思って、二十分ほどでよろしい。園児を私に貸してください。私の“漢字教育”というものを、実際にお目にかきたいと思います。指導の実際をご覧いただいた上

で、良い悪いのご意見をおっしゃっていただきたいと思います」と私は答えました。

そこで、その幼稚園の園児たちを、四歳児と五歳児と合せて四クラスほど、いっぺんに講堂に集めてもらい、“漢字教育”を始めました。

私の言う“漢字教育”とは、こういうことなのです。

子供たちに向って、「これから、先生は、皆さんに面白いお話をします」と言って、おとぎ話を始めます。

その時、お話をしながら、その話の中に出てくる、主な“人物”や“動物”“品物”“事柄”などを、漢字で黒板に書付けていきます。お話は、十分か十五分くらいで終わります。その間に黒板に書付けられる漢字は、全部でおよそ 30 字くらい。それで黒板は漢字で一杯になります。

話に先立って、「漢字を書きます」とも「漢字を教えます」とも言いません。ただ話をしながら、さり気なく漢字を書付けていくのです。

黒板に書付ける漢字は、お話の中にたびたび繰返されて出てくる言葉を選びます。そして、その言葉が出てくるたびに、その言葉を使う時に、その言葉に当る漢字を指さします。これも、やはりさり気なく、自然に行います。

この時、幼児たちは、話を聞こうと、私のほうに心も目も集中させていますので、私の手の動きに従って、自然と指さす漢字に目をやります。

ただこれだけのことで、子供たちは、黒板の漢字を、話される言葉と結び着け、「猿」という漢字は「さる」と読むのだなと理解し、覚えてしまうのです。

これは、実際を見たことのない人には、まず信じていただけないことだと思います。お話が終って、さて、黒板に書き並べられてある漢字を、一字一字、子供たちに尋ねます。すると、子供たちは、「そんな漢字は、とっくの昔に覚えているよ」と言わんばかりの顔をして、すらすらっと読んでしまいます。

黒板一杯に書付けられた漢字を全部、間違いなく読みます。順序を変えて、どの漢字を指さしてみても、ためらわずに正しく読むのです。

念のために申し上げますが、私は、子供たちに、ただ、「お話をしてあげますと言ってお話をしただけであって、決して「漢字を教えます」とも、まして、「漢字を書くからこれを覚えなさい」などとは絶対に言い

ませんでした。

ただお話をしながら、黒板に漢字を書付けていっただけで、いわゆる“漢字指導”というようなことは、決していたしません。それにもかかわらず、幼児たちは、黒板に書付けられた漢字が、何と読む字であるかを、覚えてしまうのです。

コラム

部首 甬

柵の上に人の頭の見える様子。柵の様子を見に柵にそって“まわる”のが本義。

【用】 牧場に張り巡らした柵の象形。“張り巡らす”のが本義。柵は牧場になくはならぬものなので、“必要”“役に立つ”“使う”の意味が生れた。

【勇】 甬と力との会意形声字。“湧き出る力”という意味の字で、泉の湧き出るように自然と心の中にみなぎってくる力が「勇氣」。

【通】 柵にそって道を行き来するのが本義。柵があって安心してとおれるので、“物事がうまく行われる”の意味。

この時も、園児たちは、どの漢字も元気よくすらすらと読んでいきました。黒板に一杯書付けられた、30字ほどもある漢字を、どれを指さしてみても、皆、少しのためらいもなく元気に読みました。

私は、その間、時々園長さんの顔をうかがいました。すると、きらきらと輝く園長さんの目が、漢字をすらすらと読んでいく子供たちの姿に痛いほど強く注がれていて、息を殺し、身動きもしないでご覧になっている様子が、私の目に映りました。

さて、指導が終って、私が園長室の椅子に坐った時、開口一番、園長さんの を突いて出てきた言葉は、「石井先生。私の幼稚園でも、この漢字教育をぜひやらせていただきます」という言葉でした。

その言葉や態度には、ほんの一時間ほど前の、非難を露骨に表したそれとは打って違って、心からこの教育を推進してみたいという、熱意と意欲とが満ち溢れていました。

それから、「幼児の漢字を覚える能力が、こんなにすばらしいものであるとは、今の今まで全く考えてもみませんでした。本当に夢でも見るような気持です」。園長さんはしみじみとした調子でそう語りました。

漢字を見せるだけでよい

そこで、私は、次のようなお話をいたしました。

「石井方式による“漢字教育”とは、“漢字を教える教育”ではありません。“漢字で教える教育”なのです。

たった今ご覧になったように、お話の中に出てくる言葉を、ただ漢字で書いて見せるだけの教育です。“漢字を教えよう”“漢字を覚えさせよう”などと思わずに、ただ漢字を見せるだけでよいのです。

だから、漢字について、何の説明をする必要もありません。従って、“漢字指導”などと、特別に取立てて準備することは、何もありません。

“石井方式・漢字教育”という名前は、石井方式を知らない人が勝手にそう呼んだもので、本当は、“漢字教育”というほどのものではありません。ただ、今では、そう呼ばないと通じないので、私も仕方なしにそう名乗っているのです。

ともあれ、“石井方式・漢字教育”は、ただ漢字を見せるだけの教育であって、漢字を教える教育ではありませんから、指導のために、何の知識も技術もいりません。どなたでも、やろうとさえ思えば、今すぐにでも出来るものなのです。」

子供たちは、私の話を聞きながら、漢字をただ見ているだけで、いつとはなしにそれを記憶に留めていくのです。この漢字は何と読む漢字と教えられたわけでもないのに、あの漢字はこう読む漢字だなと、話を聞きながらひとりで理解し、記憶してしまうのです。

幼児は、出会うものは何でも、皆覚えずにはいられない、……そう言いたいほど、強烈な記憶力を持っているのです。幼児期の子供と

いうものは、すべて、そういうすばらしい能力をもっているのです。

ですから、幼児たちは、努力して漢字を覚えているのではありません。幼児たちの心には、「漢字を覚えなければならない」という気持はないのです。「覚えようと思わないのに、ひとりで覚えてしまった」幼児の記憶の仕方は、そのような“無努力の記憶”だと言うことができます。

努力して覚えるのではないから、少しも苦勞はありません。従って、幼児の記憶の仕方は、“無負担の記憶”だと言うことも出来ます。いや、それ以上に、“楽しんでする記憶”だ、と言うべきでしょう。

コラム

部首 兪

▲と舟と川の合字。現在の「月」の部首には「月」のほかに「肉」の変形したもの(にくづき)と「舟」の変形したものとある。“川に舟がたくさん集まっている”ことを表したのが兪。“舟で物を運ぶ”のが本義。

【輸】 “車で物を運ぶ”という意味で、舟で物を運ぶ意味の兪に車を加えて作られた。

【愉】 “人の心を望む所に運ぶ”という意味。従って“気持ちが良い”“たのしい”こと。

【瘡】 病気を向こう岸に渡すという意味の兪と 疒で、病気の“な おる”こと。癒と同じ。

関心は記憶につながる

“記憶”の原理は“関心”の一語に尽きると思います。記憶力の旺盛な幼児たちは、関心を持って見るものは、す

べて記憶に留めずにはおきません。

私は、子供たちに「漢字を覚えなさい」とは言いませんでしたが、お話の間に、黒板に書付けられる漢字に、関心が抱かれたので、子供たちはこれを覚えてしまったのです。

ところで、子供たちは、漢字を覚えることによって何か失うものがある

るでしょうか。“無努力”“無負担”で覚える子供たちは、漢字を覚えることによって失われるものは、何もありません。それは、川の水を発電に利用していますが、電気を起したからといって、水は何も失うものがないのと同じです。

電気を起しただけ完全なプラスであるように、お話を聞きながら漢字を覚えることは、漢字を覚えただけ、完全にプラスになるわけです。

この漢字教育によって失われるものが何もなく、漢字を覚えただけプラス……しかし、本当はそれだけのものではありません。

いわゆる“六領域”にわたる幼児の教育指導を、漢字で指導することによって、それまで以上の教育効果が各領域で得られる。そこに石井方式の価値があるのです。

「石井方式で漢字が覚えられたとしても、六領域にわたる幼児の活動が犠牲にされたのでは何にもならない」と言って、石井方式を非難する人がいますが、これは石井方式の実際を知らない、全体的の外れた非難です。

子供たちにお話を聞かせるのに、ただ耳だけに訴えて聞かせるよりも、漢字を見せながら聞かせたほうが、ずっと子供の注意を集めるこ

とが出来るとは、先刻の事実が何よりも証明していると思います。

私はそう言って、後で述べるような“歌の指導”や“絵の指導”の実例を挙げて、園長先生に説明しました。そして、「“石井方式・漢字教育”というものは、このように良いことづくめで、しかも、指導する先生にも、指導を受ける子供たちにも、少しの負担もかからない学習法です」と言って、この長い説明を結びました。

こうして、初め猛烈に反対していた園長さんは、幼児の実際の活動を通して、その真実の姿を自分の目で確かに見届けますと、一転して“漢字教育”の賛同者となり、熱心な実践者となったのです。

石井方式を“食べて”もらう

「幼児に漢字を教える」と言えば、従来の常識からして、とんでもないことだと思うのが、むしろ当然だと思います。

私の主張は、長い実験に基づいて得られた結論であり、必ず世に受け入れられなければならない真理ではありますが、すぐに世の人々が共鳴してくれるとは、初めから期待していませんでした。

どんな真理でも、それまで長い期間に亘って、人々の頭を支配し

て来た考え方を変えるためには、常に、驚くほど長い年月がかかっているからです。

人間は、過去の“常識”という固定観念に縛られているため、新しい真理を真理と認めることは、なかなか出来ないものです。“常識”という色眼鏡を通して見ますから、本当の色が判らないのです。その上に、人間というものは、自分で実験し、自分の目で確かめてみれば容易に判ることで、物ぐさで、なかなか実験しないものですから、食べてみようもしない人に、その食べ物の味を教えようとするようなもので、真理を理解させることの困難さは不可能に近いものがあります。

新しい食べ物の味を知ってもらうためには、どうしてもそれを実際に食べてもらう必要があります。食べてみさえすれば、ともかくも味が判ります。味の良い悪いを言うことが出来ます。

世の中には、食べてみもしないで、やれそれは味が悪いのなんのと、無責任に味を論ずる人が何と多いことでしょう。

私は、石井方式の良い悪いを論じてもらう前に、つまり、石井方式の味を論ずる前に、“石井方式を食べてもらう”方法を考えました。それが、前述のような“実際に幼児への指導を見てもらう”ことだったのです。

この効果はてきめんでした。食わず嫌いも、一度味を知ったら一変するように、石井方式大反対の園長さんも、一転して礼賛者になり、“石井方式の実践者”になってくれました。わずか一年の間に、たちまち百余の幼稚園や保育園の支持を受けるまでに広まったのは、“幼児への実際の指導”を見てもらい、その真実の姿を理解していただけたからです。

コ ラ ム

部首 莫

莫(藁)は黄と土との合字。中国の黄河の上流には広大な黄土層がある。黄土は、質は至って細かく、粘って扱いにくい土なので、この黄土で“細かい”“扱いにくい”を表した。

【難】 黄という鳥(隹)の名が本義。手に入れるのが大変に“難しい”鳥なので難(扱いにくい鳥)と名付けた。

【勤】 “きめ細かに心を働かしてつとめる”。力は努力の力で“つとめる”ことを表す部首。